イラストでみる

平安ファッションの世界

皇族・貴族から武士・庶民まで

高島克子
Takashima Katsuko

有隣堂

装丁・本文デザイン――神長文夫　坂入由美子（ウエル・プランニング）

まえがき

平安時代と聞いて、「十二単（じゅうにひとえ）」を連想する方が多いかもしれない。着物が好きな方には「かさねの色目」として、着物コーディネートに欠かせない要素として身近にある。

近年、日本人だけでなくインバウンドの方々にも十二単体験は人気である。千年も前のファッションがなぜこれほど現代人を魅了するのか？ そもそも、なぜ平安時代に十二単が誕生したのか？

この疑問が、私に日本の歴史と着物ファッションの関係を調べさせるきっかけとなった。２０１９年夏のことである。その疑問の答えを探すうちに、おりしもコロナ禍となり、長きにわたる日本の着物ファッションの歴史をたどることがライフワークになった。結果、縄文・弥生時代から令和時代までのファッションの変遷をビジュアル（イラスト）を通し、時系列に通観できる年表を２０２０年夏に完成させた。

翌年、時代考証の専門家でもない私だが、デザイナー目線という立ち位置で解説文をつけた著書をＰＯＤ出版するに至った。そのころから、出版に関して相談に乗って下さっていた根本騎兄編集長から、ありがたいことに私が着物と日本の歴史をたどる旅を始めるきっかけとなった「平安時代

ファッション」に特化した本書『イラストでみる　平安ファッションの世界』のお話をいただいた。

私はデザイナーを長く続けているが、実は高校2年生まで絵描きになりたいと思っていた。紆余曲折があり、画家以外で絵が描ける仕事として選んだのがファッションデザイナーで、洋服の制作よりもファッションイラストを描くことが好きである。インターネットの普及以来、文字よりも絵を好む方が多いし、確かにイラストは「百聞は一見に如かず」で、頭に入りやすい。

本書では約４００年の平安時代を唐風・国風・武家風ファッションに分け、さらに法衣舞楽・皇族ファッションのイラストも巻頭に置き、通観できる構成とした。まずは平安ファッションショーをイメージで（お好みの音楽を流しながら）ご覧いただくのもお薦めである。それぞれのファッションのビジュアルを把握してから、後ろに解説が続く方が理解しやすいと思うからだ。

また、本文に登場するスタイルを振り返りたい時も、巻末にイラストを見にいくより前に戻る方が、まだ知りたくない（後の時代の）情報を先に垣間見てしまうことなく安心してイラストを眺めにいける。

現在もそうであるが、ファッションは、実は経済的・社会的背景と大きく関係している。特に平安時代は時代背景（位階制度・遣唐使廃止・藤原氏の他氏排斥、氏長者争いなど）や文化・年中行事等とも関連が強いため、関係する出来事や制度についての挿絵や図表を多く取り入れた。貴族・皇族・僧侶・武士・庶民のファッションをデザイナーならではの目線で解説したので、ぜひ本文の方も楽しんでいただきたい。

藤原道長一族が権力者となっていく経緯や、武士の台頭などにも触れており、ファッションだけでなく中世の歴史に興味のある方々、特に男性にも楽しんでいただけたらと思っている。

平安時代は日本服飾史上、男性のファッションが特に色鮮やかで、男性の「美」への探求がとても深い時代であった。おそらく現代の「美容男子」以上だろう。その発想の源に触れることは、現代社会を生きる上でも多くの気づきに満ちていると思える。

ファッションは、時代を映す鏡だ。しかし、ファッションと聞くと、たいていの方は「洋服」を思い浮かべる。もちろん、西洋においては「洋服」であるが、弥生時代から約２０００年の日本の歴史のなかで、洋服の歴史は１５０年ほどしかない。長い日本の歴史上、ほぼ全ての時代のファッションは「着物」である。

現代の着物の原型は江戸時代の「元禄小袖」で、その「小袖」の起源は弥生時代にまで遡り、「貫頭衣」といわれている。平安時代の庶民の女性や子供が着用していた「手無し」といわれる袖無しスタイルは、その貫頭衣が変化したものとされ、温暖であった弥生時代同様、現代なみに温暖とされる平安時代を映しているといえる。そして「小袖」が様々な時代背景から、下着のポジションから表舞台へと登場したのも平安時代である。

本書の出版にあたり、「なぜ平安時代に十二単が誕生したのか?」の問いに対する新たな答えが見つかり、私の「着物と日本の歴史をめぐる旅」の第一歩は完結できたように感じる。それは一つ

の時代に特化し、ファッションを掘り下げたからに違いない。

平安時代は女流文学や貴族の日記、また末期からではあるが当時の生活の様子を垣間見ることができる絵巻なども多く出版されており、様々な説が混在する。まして、実物が全く残っていないため、正確な形状・着姿なども不明な部分が多く、本書のイラストや解説とは違う説があることもお断りしておきたい。

本書を通じて、他の書物とは違う平安時代のファッションのポイントと、社会との関係性・自然と美に対する平安のセンス等をお届けできていたら幸いである。

さらに、巻末に補章「年中行事」「通過儀礼」、また生没年も入れた「藤原道長関係系図」等を用意した。巻頭イラストと合わせてドラマ・映画鑑賞のお供としてご愛読いただければ、著者として望外の喜びである。

イラストでみる
平安ファッションの世界

目次

まえがき 3

巻頭

平安ファッション イラスト図解 17

◆唐風——中国からの強い影響 18

文官朝服 18／女官朝服 19／公家女房・物の具装束 20

◆国風——日本独自の発展 22

文官束帯 22／武官束帯 24／女房装束 26／布袴 28／衣冠（略式正装） 29／（烏帽子）直衣（平服） 30／冠直衣 31／狩衣（平服） 32／唐衣裳（舞姫の物の具装束） 33／汗衫 34／袿姿（公家女房・冬の平常の装い） 36／小袿 38／単重ね（公家女房・夏の平常の装い） 40／細長 42／裳着 44／公家女子の婚礼の衣裳 46／白張（白丁） 48／浄衣 49／褐衣 50

◆法衣舞楽——僧侶と舞楽の衣裳 52

法親王裘代五条袈裟 52／僧侶袍裳七条袈裟 53／素絹五条袈裟 54／鈍色五条袈裟 55／裳付け衣（遊行の僧） 56／神楽・人長の舞姿 57／

舞楽・陵王　58／舞楽・萬歳楽　59／舞楽・迦陵頻　60／舞楽・胡蝶　61／田楽法師　62

◆皇族——格式ある装い　63

衰冕十二章　63／黄櫨染御袍　64／御斎服　66／御引直衣　68／黄丹袍　70

◆武家風——武家好みにより簡素化へ　72

院政期の唐衣裳装束　72／夏の汗衫姿　74／衣袴姿　75／院政末期・小袖重ねの細長姿　76／壺装束　78／白拍子　79／遊び女　80／強装束　81／半尻　82／童子の水干　83／水干・垂領　84／直垂　85／袿袴　86／労働着の水干　87／庶民男性　88／庶民女性　89／庶民の手無し（袖無し）　90／裹頭姿の僧兵　91／裲襠式挂甲　92／大鎧をつけた有力武将　94

第1章

唐風・国風・武家風——平安時代のファッショントレンド　97

唐風——中国文化を忠実に受け入れる　98

◆奈良からの脱出と謎多き2回の遷都

◆ファッションは奈良時代を引き継ぐ
◆「薬子の変」で女性たちは家の奥へ
◆唐文化のトレンドを追いかけた時代

国風——遣唐使廃止と藤原全盛による独自文化 103

◆日本的なものが次々生まれる200年
◆男女とも正装が簡略化される
◆権力争いの果てに藤原氏一強時代へ

貴族のファッション——男性 106

◆私服の「直衣」が天皇の日常着になる
◆鷹狩りの「狩衣」が上流貴族の私服に

貴族のファッション——女性 108

◆女官に教養とセンスが求められた時代
◆紫式部の観察眼が伝えてくれるもの

国風文化のまとめ 112

◆摂関政治の全盛と末法思想の流行
◆藤原氏の落日と武士の台頭

武家風——女性は豪華に、男性は威風堂々 103
◆武士の台頭と日宋貿易の莫大な利益
◆常識が大きく変わる女性ファッション
◆鎌倉時代につながる男性ファッション
◆絵巻物が伝える庶民のファッション

第2章 官位があったから色彩豊かに 123

公服——奈良時代からの細やかな色分け 124
◆平安前期、冠位の数だけ増える色彩
◆摂関期に色分けが減少した理由

私服とルール——「許し」と「禁色」の間で 126
◆出世すると高まる自由度
◆「自宅」で決まるステータス

女房たちの色彩——男性たちに増してカラフル 135
◆誰でも着られる「2色」とは?

◆『紫式部日記』『枕草子』が描く華やかさ

第3章
平安貴族のスタンダードな正装 141

貴族の一日——宮仕えの男性と家庭の女性 142
◆早朝から午前で終わる宮仕え
◆夫を支える女性貴族の多忙

束帯——男性貴族の正装 146
◆束帯のアイテムと着用法
◆裾の長さを競ってエスカレート

女房装束——女性貴族の正装 151
◆20枚以上、重ね着した女性もいた
◆靴を履くことを想定しないファッション

第4章
代表的な色・文様の使い方 159

かさねの色目——袖口・襟元の美しさ 160
◆四季の変化に呼応した「多彩な色彩」
◆5つの基本色「青」「蘇芳」「萌黄」「紅梅」「朽葉」
「重ね着」の美学——袿を重ねて生まれる配色 164
◆春夏秋冬の色目を重ねる
◆重ねの組み合わせの美しさが重要
文様——日本ならではのモチーフの発展 167
◆五行思想と生活様式・自然環境をもとに
◆「有職文様」として後世に残るデザイン

第5章
貴族の「持ち物」「被り物」 173
「笏」と「扇」——貴族正装の必須アイテム 174
◆右手に持つ板片「笏」は備忘録？
◆日本の平安時代が生んだ「扇」文化

「冠」と「立烏帽子」——正装と普段着で使い分け 177
◆身分で細かく規定があった「冠」の種類
◆武家の登場で「烏帽子」が多様化
「笠」と「髪飾り」——女性の頭部を彩ったもの 180
◆女性が外出時に被った市女笠・綾薦笠
◆「髪飾り」より、長い垂髪の美しさ

第6章
平安時代の身だしなみ、美人の条件 185
「長い黒髪」と「化粧」——男性がときめく身だしなみ 186
◆身長を超える髪の手入れの大変さ
◆「和の様式美」が確立した平安の化粧
不美人の条件——文献・絵巻からわかること 189
◆紫式部が細かく不美人を描写!?
◆ヘアスタイルに自由度がない時代

男性の化粧——ステータスの象徴だった 192
◆白粉・紅・眉・お歯黒の公家男性
◆平安男性は現代でもオシャレなはず

第7章 武士の登場で身軽になった衣裳 197

小袖——下着から装束のアイテムに格上げ 198
◆武士への「見栄」で貴族の衣裳が変化
◆女性貴族は寒さ対策で「小袖」を愛用

「直垂」と「大鎧」——武士が発展させた服飾文化 202
◆庶民の服から武家装束になった「直垂」
◆男性の美への探求心が結実した「大鎧」

第8章 平安ファッションからのメッセージ 207

色彩の美しさ——俗化することなく伝わった1000年の美 208

◆なぜ現代に美しいまま残ったか
◆日本独自の「国風文化」に変化したこと
◆自然と共存したカラーコーディネート

自然と美——現代に残したい平安のセンス 214

◆受け取りたい3つのメッセージ
◆今こそ平安文化を思い出したい

補章

年中行事と通過儀礼 219

年中行事——役割を果たすことが貴族の責務 220

通過儀礼——誕生、結婚から長寿の祝いまで 240

【50音順】難読ファッション用語の読み方と意味
①【あ】96／②【か】122／③【さ】140／④【た】【な】158／⑤【は】196／⑥【ま】〜【わ】218

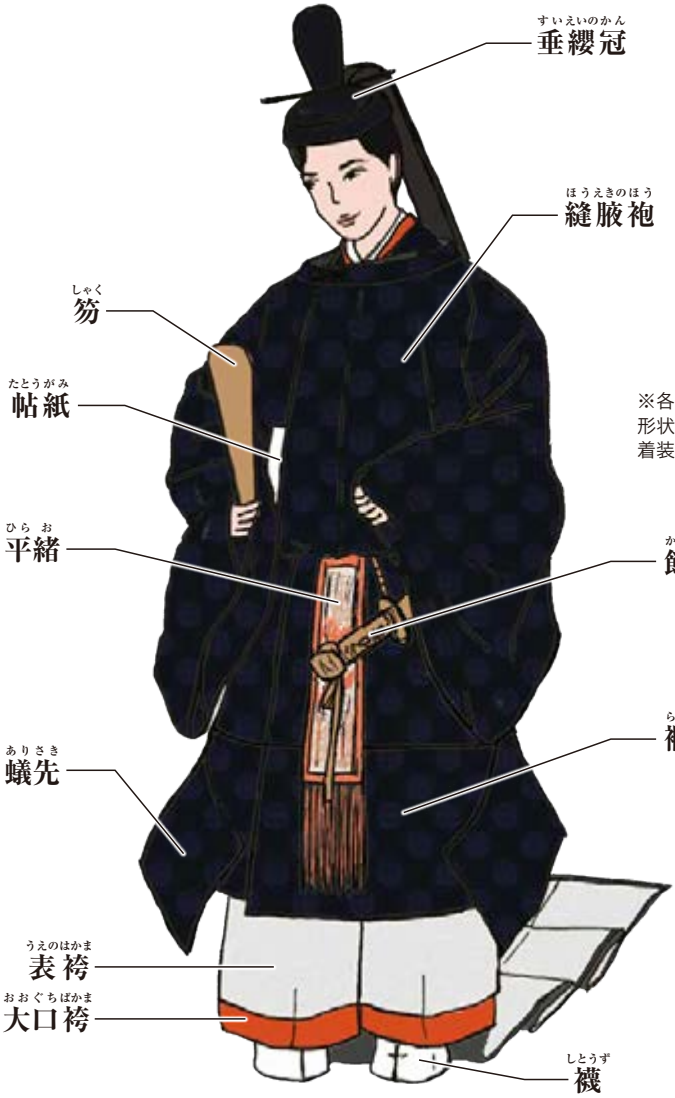
藤原道長関係系図 246

平安時代・略年表 248

参考文献 250

あとがき 253

文官束帯



※各々のアイテムの形状は第3章の束帯着装順(図解)を参照

承平6(936)年、『九条殿記』に初めて「束帯」の名が登場(奈良時代の朝服が大きく寛容になり、形を整えて成立したもの)。年々、袖口や裾の広さに加え下襲の長さも拡大し、何度も規制された。

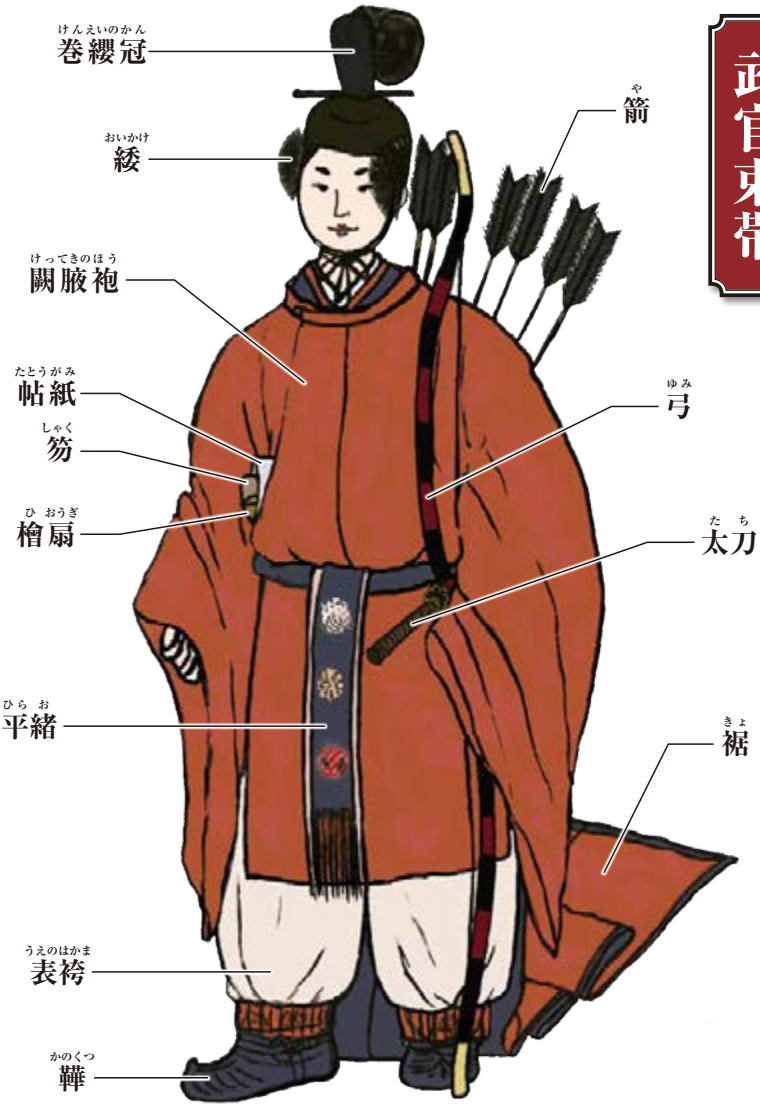
※平安末期には、糊を貼った強装束(こわしょうぞく)になる。

バックスタイル

下襲の裾の高欄がけ

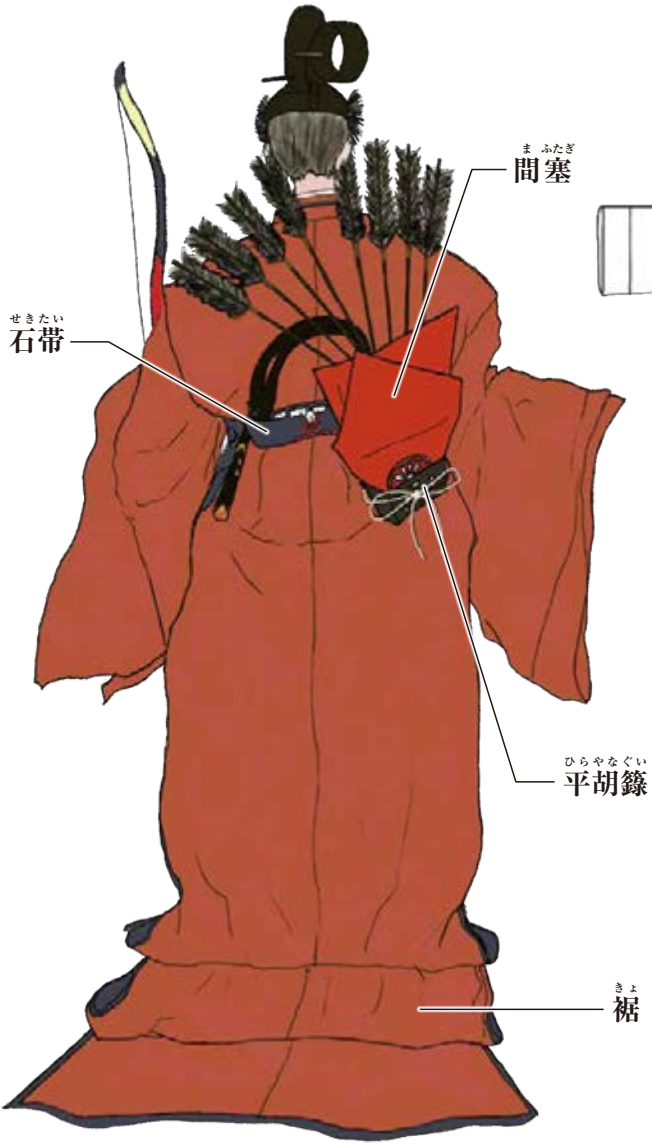
※『年中行事絵巻』より著者作画

武官束帯

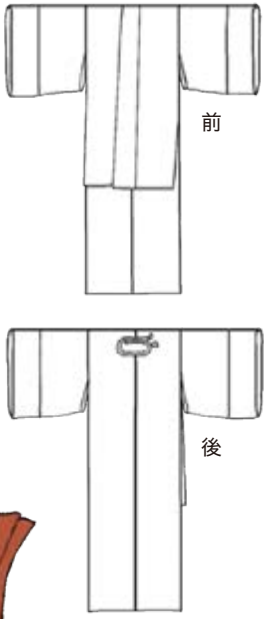


平安中期の公家武官四位以下の束帯。袍が闕腋(動きやすくするためか脇が縫い合わされていないのが特徴)。三位以上の公卿は儀仗の際を除き、縫腋袍を着用した。垂纓冠で緌(冠につけて顔の左右を覆うもの)はかけない。六位以下の武官は細纓冠を付ける。

バックスタイル



闕腋袍



※表袴の形状は、第３章の束帯着装順の図解（P148）を参照

女房装束（にょうぼうしょうぞく）

※各々のアイテムの形状は第３章の束帯着装順（図解）を参照

女性の正装、袴の上に単を着用し、その上に何枚もの衣を重ねる。重ねの色目、襲の色目は季節や行事で規定がある。女性が公式の場所に出る機会が減り、後宮での服装のため、公服でありながら私服的な感覚もある。

第4章

代表的な色・文様の使い方

かさねの色目――袖口・襟元の美しさ

◆四季の変化に呼応した「多彩な色彩」

平安時代と聞いて「十二単」を連想される方も多いだろう。そして、次に思い浮かぶのが、その袖口や襟元の「色かさねの美しさ」ではないだろうか。前章でも述べたが、平安時代ファッションの最大の魅力は、華やかで優雅なカラーコーディネーションである。それは男性・女性両方に指摘できる。

平安朝装束の色には、「染色」「織色」「かさねの色目」があるといわれている。

「染色」とは、白絹織物を染料で染める色彩表現で、当時はすべて草木染めである。

「織色」とは、先染（糸の状態で染色）の経糸と緯糸で一枚の布を折り上げる色をさす。経緯それぞれ異なる色にすることも可能である。

「かさねの色目」は2種類あり、袷仕立ての「衣」の表裏の裏を重ね合わした色を指す場合と、装束としてその衣を何枚も重ね着してその表にあらわれる衣色の配列を指す場合である。本書では、カラー図解作成の際に参考にさせていただいた『新版 かさねの色目　平安の配彩美』（長崎盛輝著、青幻舎）に従い、前者に「重ね」、後者に「襲」の文字を当てさせていただき、「重ねの色目」「襲の色目」と表記することとする。

※布に関する場合は「縦横」でなく、「経緯」を用いるのが一般的である。

では、男女ともに気を遣った「かさねの美」とはどういうものなのだろうか？

ただ単に美しい配色、カラーコーディネートというわけではなかったようだ。配色に四季折々の植物名をつけ、季節感とその植物の風情を取り入れて装いを楽しんだ。また、歌詠み（和歌）を大切な教養としていた貴族たちにとって四季折々の植物を愛でること、自然の移ろいに敏感でいることは生活の一部であったといえる。

『枕草子』の中にも、植物や虫の名は多く登場し、清少納言も実によく観察している。そして、四季だけでなく十二ヶ月・二十四節気・七十二候の微細な気候環境に呼応した多彩な色彩も観察して生活の中で生まれたのが、「かさねの色目」である。

◆5つの基本色「青」「蘇芳」「萌黄」「紅梅」「朽葉」

まず、袷仕立ての「衣」の表裏の裂を重ね合わした色「重ねの色目」だが、当時の衣は、真夏以外はすべて袷で、袖口・襟元・裾などで裏が表に僅かにのぞいていた。少し見える裏と広い面積を占める表地との配色が、楽しみとなったのだ。

ただ、当時の絹は現在のものよりも薄かったため、表が白や薄い色の場合は、裏地の色が表に反映する。表地の白色に裏地の赤色がほのかに透けて、夕陽に映える桜の美しさを象徴しており、「桜かさね」と称している。なんと粋なネーミングなのだろう。平安朝の貴族達の自然との関わり方、観察眼を見習いたいものである。

この「桜がさね」であるが、平安朝文学にも男性・女性問わず多く登場するが、五衣の「襲の色

目」には見られない。また、裏地の色に関しても赤色以外に葡萄色・二藍などの諸説あるようだが、私としては赤色が一番しっくりくる合わせ方だと確信している。

次頁の「重ねの色目と基本色」では、季節ごとの代表的な重ねの色目(『枕草子』や『紫式部日記』などで取り上げられていた色目)を中心に紹介している。ただし、組み合わせや色の配合については諸説ある。これらはごく一部で実際には100を超える「重ねの色目」の組み合わせがある。平安貴族がいかに日本の四季と共に生き、自然を愛でていたかが窺える。

男性の場合は、女性のように五衣を着用することはないので、直衣と出衣や狩衣の袖付けのあきから覗く下の衣との配色で重ねの色目を楽しんだようだ。

これら「かさねの色目」の中心となる基本色としての5色を紹介する。色目は次頁のカラー図解※を参照していただきたい。

青　平安時代は、キハダ(黄蘗)などで下染めした上に藍をかけて色を作った。やや青みがかった緑。現在の青は、当時では縹と呼ばれる色に当たる。

蘇芳　マメ科の熱帯植物スオウから採取した染料で染め、濃蘇芳は黒っぽい赤紫、中蘇芳は鮮やかな赤紫に近いピンクで、淡蘇芳は紫味のピンクである。

萌黄　黄緑色で語感から若向きの色とされ、この萌黄の入る組み合わせは若者向けとなる場合が多い。

紅梅　紅梅の花の色に似て、かすかに紫味を含んだ淡い紅の色をいう。

朽葉　黄色い落ち葉を指す色で、平安時代は赤みがかった黄色をさす。

※印刷上、実際の色と多少のずれがあることをご容赦いただきたい。

重ねの色目と基本色

重ねの色目

裕仕立ての衣の表裏の裂を重ね合わせた色を指すかさね色目（例）

春

紅梅
表紅梅・裏蘇芳

桜（重）
表白・裏赤花

梅重
表濃紅・裏紅梅

柳重
表淡青・裏淡青

山吹
表淡朽葉・裏黄

藤
表薄色・裏萌黄

四季通用 松重
表青・裏紫

四季通用 今様色
表紅梅・裏濃紅梅

夏

杜若
表淡萌黄・裏淡紅梅

菖蒲
表青・裏濃紅梅

若菖蒲
表淡紅・裏青

花橘
表朽葉・裏青

秋

桔梗
表二藍・裏濃青

女郎花
表経青横黄・裏青

残菊
表黄・裏白

冬

椿
表蘇芳・裏赤

雪の下
表白・裏紅梅

氷
表白・裏白

基本色

青

蘇芳

萌黄

紅梅

朽葉

第5章

貴族の「持ち物」「被り物」

「笏」と「扇」――貴族正装の必須アイテム

◆右手に持つ板片「笏」は備忘録？

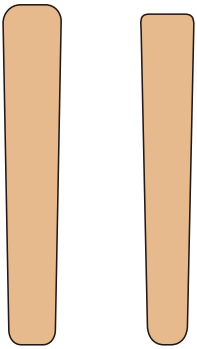
平安貴族の持ち物であるが、階級や使用機会によって形状や材質が違うものとして笏がある。6世紀、欽明天皇の時代に伝来したとされる。

中国では「コツ」と呼ばれ、紀元前の周の時代から使われている。日本では音が「骨」に通じることを嫌い、また当時、長さが1尺だったため「シャク」と発音されるようになったとされる。儀式の複雑化に従い、備忘のための式次第などの覚書の役目として用いることもあった細長い板である。礼服・束帯・布袴着用時に右手に持つ板片であり、形状の差を以下にイラストで示す。

礼服（平安朝中期から天皇の即位の際のみ着用となった衮冕十二章）の際の材質は象牙製で、束帯・布袴の際は、木製である。イチイ（一位）の板目が最上で、柊や桜などの板目が良いとされる。神職は装束に関係なく木尺と常用する。

形状は、天皇の通常用は上下とも方形、臣下の慶事用が上

笏の違い



扇の種類

檜扇

蝙蝠扇

方下円となる。

ただし、長さは1尺とは限らないようである。

◆日本の平安時代が生んだ「扇」文化

次に「扇」である。

笏から派生したといわれるもので、檜扇（ひおうぎ）と蝙蝠（かわほり）扇の2種類がある。檜扇は元慶（がんぎょう）元（877）年と記されたものが発見されたものが最古とされる。当初は男性が用い、女性は奈良時代から使用していた「はしば」という団扇の一種を継続使用していた。平安中期あたりから女性も使い始め、宮中の女官や女房達が常用するようになったとされる。

檜の薄片を末広がりに綴（つづ）り合わせ、手元に要（かなめ）をつけ、先を絹の練糸で編み綴った板扇で、表に彩絵や金銀箔を施し、束帯など公の儀式の際の持ち物になった。

国風文化の中で優雅で繊細な装飾性が加わり、骨の数も多くなり、草花や人物などが描かれた（鎌倉時代以降に綴じ糸の余りを親骨（おやぼね）の上端から垂らすようになったといわれ、江戸時代の十二単では色鮮やかな長い紐を扇に巻き付けて持っている）。

平安中期では、骨の数が官位で差があり、殿上人が23本、公卿が25本だったようだが、後に全て25本となったようである。「袒扇（あこめおうぎ）」という名も女性貴族が「袒」を着用時に登場するが、基本的には檜扇と同じものである。袒扇も檜扇も季節的には冬のものである。

蝙蝠扇は、平安時代に檜扇に次いで作られ始めた扇で、紙製で骨は竹製で片面に地紙という扇面用紙を貼った片貼扇であり、当初の骨の数は5本ぐらいであった。

紙には詩歌や絵が描かれたが、やがて女性用檜扇にも劣らないほど華やかなものも登場し、骨数も次第に増えた。基本的に夏、直衣や狩衣着用時に用いられた。

他に、束帯・衣冠・直衣姿などで扇を挟んで懐中する「帖紙（たとうがみ）」がある。鼻紙や、即興で和歌などを書くために用いた。縦30センチ・横40センチくらいの大きさがあり、位階により色、枚数、折り方などに規定があった。現在の懐紙（かいし）のようなものと考えて良いだろう。のちに装飾的なものとして扱われるようになり、女踏歌（おんなとうか）の舞姫も右手に檜扇（ひおうぎ）、左手に帖紙を持ち、舞っている姿が『年中行事絵巻』にも描かれている。

女踏歌とは、平安時代から1月16日に宮中で行なわれた「踏歌の節会」で、40人の舞姫が足で地面を踏みながら新年を祝うものである。

女踏歌の舞姫

※『年中行事絵巻』母屋大饗での
紫宸殿での踏歌より著者作画

「冠」と「立烏帽子」――正装と普段着で使い分け

◆身分で細かく規定があった「冠」の種類

ここからは「冠」について述べることにする。

衣冠束帯の着用時、頭にかぶる物で、雑袍聴許（勅許によって日常着である直衣を許された）の場合、冠直衣となり直衣でも晴の時に用いられ、黒の羅で作られる。構成は三つの部分に分かれ、頭に被る部分と、巾子という髻を納める部分、纓という背中にたらす長細い薄布となる。

材質は五位以上が有紋で四菱紋となり、六位以下は無紋である。また、武官と文官で纓の形状が変わり、天皇以下、文官は纓をそのまま下に垂らした垂纓冠を被る。纓は巾子の下方の纓壺に纓の先につけた棒状のものを差し込む仕様となっている。ただし、この纓壺は院政時代からとする説もある。

平安時代は、巾子に髻を入れて、固定するために笄（簪ともいう）を差し込んでいたため、あごの下で使う掛緒は使用していない。江戸時代以降の天皇は纓が上がったままの立纓御冠となり、今上天皇も即位の礼で強装束の束帯に立纓御冠のお姿だった。

これに対し、纓を内巻きにして纓挟という黒漆塗りの切れ込みを入れた木片で留めるタイプの冠を巻纓冠といい、武官が着用した。地下人（昇殿許可のない）武官や六位の蔵人（蔵人は六位でも殿

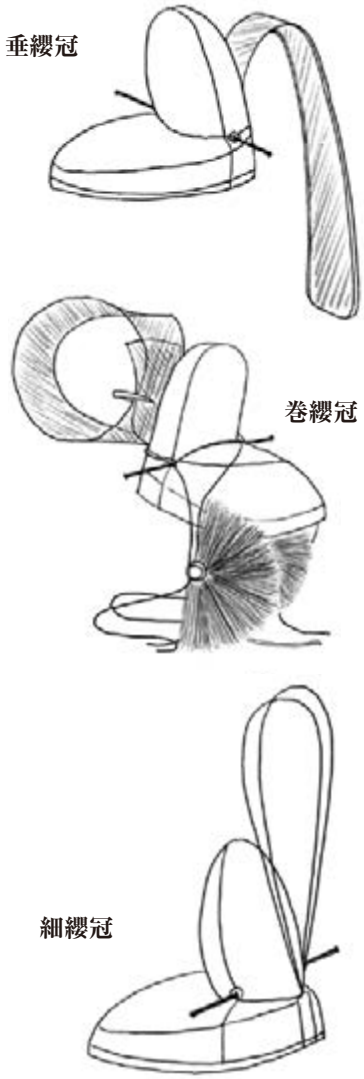
上人(じょうびと)は幅の狭い細纓を同じく内側に巻き上げて着用し、細纓冠(さいえいのかん)と呼ばれた。

武官の被る冠には、なぜ付けられたのか理由が定かでない緌(おいかけ)という馬の毛をブラシのように束ね扇形に開いた飾りを付けた(目など顔を守るためか、威嚇のためであろうか)。緌には紐が付いており、文官よりも運動量の多いシチュエーションが多い武官には、冠をより強固に固定する役割もあったのだろう。

◆武家の登場で「烏帽子」が多様化

このように、冠は儀式などでの正装または略正装での被り物であったが、貴族の略礼である普段の装束の直衣や狩衣の際に被っていたのが、立烏帽子(たてえぼし)である。つまり、烏帽子は、冠に次ぐ男性の

冠の種類



被り物で、中国の圭冠（はしはこうかぶり）が変化して平安時代中頃に登場した。

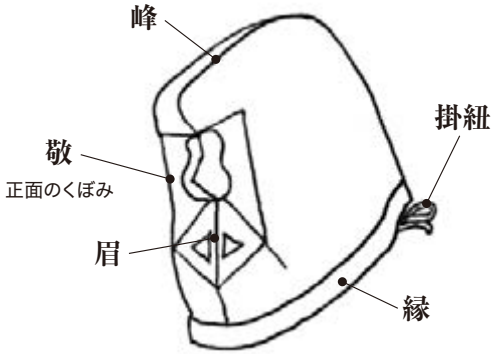
室町時代以前の日本では、公家だけでなく庶民の男性も頭頂を露出することは非常に恥ずかしい行為だと考えられていた。公家に至っては、就寝時も烏帽子をかぶっている様子が絵巻に多数描かれている。ただし、天皇、皇太子は常に宮中にいるため、冠を着用しなければならなかった。

烏帽子は基本黒で、材質は様々であった。最初の頃は柔らかい素材だったが、平安後期の院政期以降に服装が強装束化するにつれて、漆で塗り固めたものへと変化していった。上のイラスト右下の掛紐（懸緒（かけお）ともいう）は烏帽子を固定するための紐である。本来は掛紐なしに、小結（こゆい）という内側につけた紐を髷の根元に結びつけて固定していた。

その他の烏帽子の種類であるが、「敬」という烏帽子正面中央に作られた凹みを作らずにストレートタイプで、身分の低い人々が被った平礼（ひれ）烏帽子、また一般庶民の男性や武家が兜の下に被った萎（なえ）烏帽子（梨子打（なしうち）烏帽子ともいう）という漆を塗らない柔らかい烏帽子もある。

さらに、院政期に武家が登場してくると、動きを妨げないように立烏帽子を複雑に折り曲げて形を作り、上部に三角形が見えるタイプの侍烏帽子、また天皇の座を退いた上皇や武家まで広い範囲で用いられた風折（かざおり）烏帽子がある。立

立烏帽子の名称



烏帽子の峰を右折にしたものが上皇用で、左折はそれ以外の人々が着用した。

「笠」と「髪飾り」――女性の頭部を彩ったもの

◆女性が外出時に被った市女笠・綾藺笠

女性が外出時に被ったものとして、まず「笠」がある。代表的なものは、市女笠（いちめがさ）と綾藺笠（あやいがさ）である。どちらも男性も女性も被ったようであるが、絵巻等で見る限り、市女笠は女性、綾藺笠は男性に多く、流鏑馬（やぶさめ）などの行事や祭り（祭りの際は女性も被って舞っている姿が描かれている）の際に装飾し

続きは書籍『イラストで見る平安ファッションの世界』にてお読みいただけます。

その他の烏帽子の種類

平礼烏帽子

萎烏帽子（梨子打烏帽子）

侍烏帽子

風折烏帽子